

日本体育大学大学院 祝辞

日本体育大学大学院に入学された皆さん、誠におめでとうございます。日本体育大学の教職員を代表して、心からお祝い申し上げます。またご列席いただきましたご家族の皆さま、ご友人の方々、さらにご支援いただきました方々にも心からお喜び申し上げます。

本学は1891年から我が国の体育・スポーツの教育に尽力して参りました。ここで育った多くの同窓生が、我が国の体育・スポーツ現場を支えてきましたが、その中心には、保健体育の教員やスポーツ現場で指導を続けてきた方々がいたわけです。一方で、こうした方々を支えてきた先輩たちもいました。体育・スポーツ科学を牽引し、スポーツ指導に携わる先人たちの経験を支えてきた研究者の方々です。現場で培われてきた経験知の蓄積は重要ではありますが、時代の社会状況にも影響を受けるため、経験知が科学的な知見と必ずしも合致するものばかりではありませんでした。こうした体育・スポーツの在り方を書き換えてきたのが研究者の発信する研究成果であったと思われまます。

先月行われたワールド・ベースボール・クラシック（WBC）においても、おそらく多くの点において、侍ジャパンの監督、コーチ、選手たちの中に科学的知見が持ち込まれたのではないかと思います。大谷選手がチームに合流した時の体つきは、間違いなく科学的なトレーニングに加えて、栄養と休養、あるいはボディケアについての最先端の科学が導入されたことを想像させますし、またフィジカル面が強くないとされてきた日本チームが抜群の攻撃力を持つことができたのは、打撃フォームの動作分析から、より自分自身に見合った長打力を引き出せるボディターンズイングを身につけたり、打撃や打球分析がおこなわれたりしたからだだと思います。また、相手ピッチャーの様々な投球解析も行われたのでしょうか。今の野球が「データ野球」でありスポーツ科学に裏打ちされたものとなっているということは間違いありません。また、こうした選手やチームのパフォーマンスを上げることだけでなく、大会終了後に栗山監督に注目が集まったことに象徴されますが、監督と選手間の人間関係や選手を支える家族の振る舞い、また、WBCがどれほどの経済効果をもたらすのか、どのような社会現象を引き起こしたのか、さらに選手自らのSNSの投稿によるソーシャルメディアの可能性や課題など、人と社会が関係する事象についても実に多くのことが取り上げられました。これら全てのことが、これからの皆さんの大学院での学びと結びついているのではないかと思うわけです。このように見ていくと大学院での研究領域は大きな広がりを持ち、また多様性も無限です。自分自身が最も興味関心の持てるテーマを見つけ出して研究を進めていただきたいと思えます。

大学院の時代は、時間の多くを研究に注ぎ込むことができます。博士前期課程の2年間、博士後期課程の3年間は、気がつけばすぐに終わりを迎えてしまいます。皆さんに与えられた時間を有効に利用し、そして納得のいく成果を上げていただきたいと思えます。日本体育大学の大学院は皆さんの可能性を引き出すことのできる大学院です。指導教員だけでな

く多くの先生たちと議論を重ね、自分自身を一回りも、二回りも大きくしていただきたいと思えます。

最後になりますが、皆さんの大学院生活がより実りあるものになることを祈念して、私からの祝辞とさせていただきます。

令和5年4月3日

日本体育大学 学長 石井隆憲